



最後のフロンティア ミャンマーの可能性

**Last Frontier
Myanmar possibility**

松田 健 著
by Ken Matsuda

成長の可能性秘める

豊かな資源、豊富な労働力

勤勉な民族性！！

カギとなる民族問題解決

重化学工業通信社

前文「ナイセスト・ピープル」 8

1章 ●癒しの国ミャンマー ●●● 13

施しを最重要視するミャンマー人 14

外国人も無料で受け入れる老人ホーム 23

根っから親日家 ウ・テハン 26

「ビルマ方面戦没者遺骨収集政府派遣団」を世話 36

捜し求めた「マルモ」氏が目の前に！ 39

テハン氏関係のミャンマー人とバンコクで遭遇 46

バンコクから日本企業のミャンマー投資を支援する宇塚レオン氏 48

2章 ●ミャンマー連邦共和国の悩み ●●● 53

アジアの中心めざす首都ネーピドー 54

135もの少数民族抱える連邦共和国 62

イスラム教徒の暴動の背景 69

ミャンマーの地の果て 中国国境ムセを訪問 72

《出国許可》が無い、とバスから降ろされる 79

賑わうムセに3か所ある「中国国境」 83

ムセでは付き合わざる得ない隣の中国人 87

ヤンゴンからバスでタイに戻る 90

泰緬鉄道の跡を見つける旅 95

遅々として進む「東西回廊」 99

テイン・セイン大統領とスーチャー氏 106

急激な変革に伴う大損を我慢したミャンマー人 110

「民主化」を急ぎすぎた軍事政権 115

3章 ● ミャンマー人がいるビジネスの現場 ● ● ● 119

マンダレー ゴールド物語 120

タイ人観光客もびつくり マンダレーの金箔工場 121

「100%ミャンマー人として生きる」中国人 123

珍しい沈香（じんこう）ビジネス 129

日本の衣料メーカーも中国から進出してきた中部のピイ 132

うまい日本食が毎日食べられる地方都市 136

イラワジデルタ中心の街パテイン 138

銘菓「ハーラワー」を作る工場	141
新婚夫婦が未知の事業にチャレンジ	142
資金が無くても起業したミャンマーの女子工員	145
ヤンゴンのローカルの縫製工場	148
日本向け受注も計画	152
現在は熟練工の多くがタイなど海外で働く	153
ミャンマー国内市場がメインの強み	155
中国生産を上回った奥田縫製	156
最大の韓国系縫製工場	159
ミャンマーを盗みゴミ箱扱いする中国	162
中国の偽物に対抗する製品開発	166
英国人と合弁で信楽焼の狸を焼くミャンマー人	170
ダウエイの地場産業	174
世界の海で活躍する船員を育成	179
「タイに帰りたい」ミャンマー人	183
「経歴を調べたら大卒だった」タイ工場のミャンマー人	189
タイで日系企業向け凄腕経営のミャンマーの少数民族	192
日本政府によるミャンマーへの債務免除に強く反対	201

4章 ● ミャンマーの工業団地 ● ● ●

203

工業用地の整備を進める政府

204

ティラワ開発に関心高める日本企業

213

タイと直結するダウエイ経済特区（DSEZ）開発

218

ホーチミンからの「南部経済回廊」がダウエイまで「開通」

229

工事以外のトラック往来はまだ皆無に近い

231

武装民族への道路通行税はバーツで支払う

233

国境にカレン民族解放軍と提携するタイの工業団地

236

5章 ● ミャンマーで勝つには ● ● ●

245

「日本企業は売る気がない」の評価では勝てない

249

ミャンマーは「最後のフロンティア」か

251

ミャンマーも人手不足

259

児童の雇用を誇る経営者

264

労働力不足はコンピュータ化で解消

268

6章 ● 世界に翻弄されたアウンサンスーチー氏 ● ● ●

301

天然資源が豊富なミャンマー

270

農業の潜在力は大きいが：

275

「有機農法」を売るミャンマーの農業

278 281

ミャンマーで農業に取り組んだ石塚氏

法令順守では勝てない？

294

スーチー氏を激変させたモンユワ騒動

302

中国側の仏教軽視が背景

304

鉱山問題の背景に欧米の諜報活動も？

309

軍の無法には無法で対抗し続けたスーチー氏

310

経済低迷に直結する「スーチー・リスク」が減少

315

あとがき

319

年表

323

施しを最重要視するミャンマー人

けだしミャンマーは癒しの国である。かつて、私は人生が行き詰まり、一時的ながら、うつ病的症状に悩まされた時期があった。その時も、ミャンマーの友人から招かれていたが、しばらくは出かける元気がなかった。しかし、そのうち気を取り戻して、気分転換になると考えて無理して出かけた。そしてミャンマーに到着、その雰囲気には溶け込んだとたんとうつ病的な症状が治っていた。その後、現在までそのような症状は出ていない。これはミャンマーの癒しに助けられたものだと感じている。同年代の知人から子息の「閉じこもり問題」について相談された時、「息子さんをなんとかミャンマーに送り出せば治せるはずですよ」とアドバイスしたのは言うまでもない。



ミャンマーの象徴
シュエダゴンパゴダ

ミャンマーに出かけるたびに友人が増えるが、彼らのほとんどが熱心な仏教徒である。日本では葬式か、正月以外にもお寺に行かないきわめて淡い仏教徒である私がミャンマーでは頻繁にパゴダ（お寺）にでかける。パゴダでお布施すると、不要だと言うのに管理事務所から領収書が発行

「ビルマ方面戦没者遺骨収集政府派遣団」を世話

その後のテハン氏は、メイクテイラに戻って綿花商をしていたが、有名な映画監督だったウ・ツカ監督に見いだされて映画スターになった。映画俳優を7、8年務めて有名になったテハン氏はネ・ウイン政府からメイクテイラ県の知事に任命された。知事を退任してからは日本語を話す機会がない日々を送っていたテハン氏だが、ある日、日本語の仕事が舞い込んできた。日本政府が組織する「ビルマ方面戦没者遺骨収集政府派遣団」の通訳としてテハン氏はメイクテイラをベースに1975年（昭和50年）から77年にかけてこの派遣団の世話をすることが決まったのだ。

最初の「ビルマ方面戦没者遺骨収集政府派遣団」は1975年1月、140人からなる団体で、その一部が激戦地だったメイクテイラにやって来た。76年1月に第2次、77年3月に第3次収集団が派遣され、テハン氏は遺骨収集活動に没頭した。テハン氏は、「毎朝、ご飯にお砂糖をたっぷりかけ、そして半熟卵に味噌汁という最高の日本食をいただいて力をつけ、がんばりました」という。「ビザの期間は1か月間で、だいたいは25日間滞在されました。メイクテイラに来た日本人は第1回が16人、2回目が25人、3

賑わうムセに3か所ある「中国国境」

ムセの中国側は雲南省瑞麗で、上海から杭州、昆明を通って中国を横断する国道320号の終点にあたる。中国の要請で、2002年から雲南省昆明とマンダレー間をアジアハイウェイ（AH）の14号線として認められるなど、中国もミャンマー市場を重視した、経済活動を強化している。ムセには3か所の国境ゲートがあり、各ゲート間は数百メートルずつ離れ、どこもかなり立派な門を構えて賑わっている。ひとつは人だけが往来する国境で、ミャンマー人と中国人だけは簡単に往来できる。筆者が出頭した入国管理事務所もここにある。ミャンマー人は1000チャット（約100円）を支払って中国雲南省内の許可された地域なら1週間以内の訪問ができる。他に大型トレーラー、トラックだけが通行するゲートは日に3000台もが往来するミャンマー最大の国境貿易ゲート。他に、小型のバンやトラック、手押しのリヤカーなどが両国の商品を満載して通過するゲートがあり、そこでは荷物の往来をまじかに見ることができる。リヤカーでの国境貿易では、ほとんどが中国からミャンマー側への輸出で、荷はほとんどチェックされずに通過している。

ムセでは付き合わざる得ない隣の中国人

私がモノづくりに関心があることを知っているミャンマーの友人はムセでも工場を探してくれたが、ムセに工場らしき建物は皆無だった。見学したのはローカル向けの家具や町工場の鉄工所、ケーキやパンの工場などで他は中国からのコピー製品の専門店などだった。お菓子工場は中国人経営で装置すべてが中国製、パン工場でも小麦粉、乳製品などの原料はすべて雲南省製だった。

ムセの各ゲートなどからすぐ眼の前に中国の瑞麗が良く見えるが、ムセにはない高級ホテルなどの建物が中国側には林立、両国の経済格差が歴然としている。これもミャンマー人の反中国感情を高めているようだ。国境の雲南省側の瑞麗市では重慶の二輪メーカーである銀翔がミャンマー市場向けの生産を活性化させている。中国の四輪メーカーも瑞麗に工場を建設中だという。鄧小平が沿岸部から先に発展しようと指導し、そして沿岸部から西の内陸部へと中国の経済開発は進んだ。ムセを訪問して、今や中国が内陸部の開発を終えて、今度はさらに西にあるミャンマーを新たな市場としようとするパワーを強く感じた。

「100%ミャンマー人として生きる」中国人

年数回は出かけてきたミャンマー訪問で、古都バガンのパゴダなどで、ミャンマーのあちこちの仏像に筆者も金箔を貼って健康などをお願いしてきた。安くはない金箔の束を仏像に貼りながら、金箔すべてがうまく下紙から剥がれず一部が紙に残ってしまうことがあり、もったいないと感じた記憶が残っている。しかし今回のマンダレーのマハムニ・パヤー寺訪問でそれが杞憂であることが分かってうれしい気分になった。



100%ミャンマー人として生きるウゴジー一家と左から2人目は筆者

マンダレーの顔とされる仏塔（パヤー）であるマハムニ・パヤーの事務所のトップを紹介してくれたのは、ミャンマー人の友人の友人で、この紹介のおかげで、この有名な仏塔の隅々まで見学できることになった。仏塔の横に一般人の参観ができないように区切られた工場があった。数10メートルは離れているとは言え、国宝級の金の仏像がある場所のすぐ近くにいくつもの燃える炉があること自体、私は驚いたが、行われている作業の内容を知ってさらに驚嘆した。

うまい日本食が毎日食べられる地方都市

厳しい投資環境の地に駐在する日本人にとってきわめて重要な投資環境の1つが、日本食を毎日食べられる環境にあるかどうかという点である。パイに滞在中、私が毎日何回も食事にでかけたのが同地で唯一の日本食レストランである『横浜』。私がチャーターしていた白タクの運転手が教えてくれた『横浜』は風向明媚な大河エーヤワディー河に面した2階建てビル。「建設する当初は3階建にして、そこをゲストハウス（ホテル）



パイの日本食レストラン「横浜」

にしたかったが、その許可が出ませんでした」と語るのは『横浜』のオーナーである上村正幸（うえむら まさゆき）氏（昭和19年8月生まれ）。2014年8月に70歳になったが、とてもそんな年に見えない元気な人で、外から丸見えの厨房では上村さん自らミャンマー人従業員と一緒に客の注文の料理を作っていた。

上村さんがここにきたきっかけは、愛妻の突然の死だった。横浜（神奈川県）の弘明寺でブティックを夫婦で経営してい

資金が無くても起業したミャンマーの女子工員

ヤンゴンで1日単位でお願いすることが多い旧知の個人タクシーの運転手さんは、筆者の工場視察好きを心得てくれているので、ある日、次のアポまで長時間空いた時に「知人の工場も見てみないか」とどこかに携帯電話をかけてくれた。運転手さんの知人とはローカル衣料工場で製造した衣料を小型バンで運ぶ運転手仲間のカイン・ウイン・トゥン (Khine Win Tun) さんという23歳の男性。同氏は幹線道路で待つて出迎えてくれた。工場は住宅街を何度か曲がった鉄筋アパートの一階を改造した町工場だった。カイン・ウイン・トゥン氏の姉が社長のイン・モン・トゥー (Yin Mon Hwe) さん (26歳)。なんと、彼女は社長だというのに、一般従業員と同じミシンを使つて道路側の最前列に座つて従業員とまったく同じ縫製作業に熱心に取り組んでいた。あちこちで中小企業の工場も見てきたが、こんな風景は筆者にとって初めてのことだ。従業員全員が夢中でミシンを使う社長の背中を見ながら働いている。

3年前に誕生したこの会社名は「M I B A M Y I T T A」(ミバ・ミッタ)で、ミバは親、ミッタは慈悲を意味するという。70歳の父親と60歳の母親が健在だが、母親はこの

日本向け受注も計画

この女性オーナーであるド・シューチン会長は、まず工場見学をアレンジし、終わると応接室に同社幹部を集めて取材の場を設定してくれた。同社幹部がそろっている今がシャツターチャンスと考えた筆者がカメラを取り出したところ、「写真に写りたくない」とド・シューチン会長は部屋からさっさと逃げ出してしまつて、ついにこの部屋にはインタビューの最後まで戻つて来なかった。英語が通じないので引き留めることができなかったが、この部屋での取材が終わつて工場に戻った時には通訳を介して筆者の質問に上機嫌で応えてくれた。ド・シューチン会長は、どうやら派手なことは一切お嫌いらしい。

「代理店もないので日本向けの仕事はしたことはありません。でも今後、機会があれば日本向けにも取り組んでみたい。しかし日本向けデザインは私には無理だから、まずサンプルを見せてください」などと語った。ウイン・ナイン副社長は、「1度だけ商社経由で日本向けの仕事を見積もりしたことがありましたが、値段がまったく合わなかったのでお断りしました」という商談があつたことを明らかにした。

ミャンマー国内市場がメインの強み



「A1ガーメント」の衣料工場で

ミャンマーの数倍は人件費が高い中国やベトナムなどの日系衣料工場がミャンマーに進出しているが、ミャンマーに進出している日系企業など外資の縫製工場で行われているのはCMP（カット・メーキング・パッキング）という委託加工方式。生地などの原料を中国やタイなどから輸入、ミャンマーの安い労働力で製造された繊維製品はその100%を海外に輸出しなくてはならない。ミャンマーに進出した日系など外資衣料工場のほとんどがこの方式で生産活動を行っている。しかしスマイルワールド社がある「ヤンゴン工業地区」内に欧米の経済制裁開始後でも輸出主体で生き残り、欧州や日本向け衣料を生産しているミャンマー資本の「A1ガーメント」という衣料工場では、日本向けの衣料の委託生産がメインだが、ミャンマー国内市場向けにも力を入れている。

日本政府によるミャンマーへの債務免除に強く反対

日本へは年に何度も訪問し、たまにお嬢さんを同行させる親日家であり、同時に大変なミャンマー愛国者でもある。しかしアウン氏は日本政府がミャンマーの債務免除したことに最初から反対してきた。アウンさんは「ミャンマーへの日本の投資を増やすなど、他の方法で援助してほしい」と期待している。2012年に日本政府が決めた3000億円の債務免除は「ミャンマー人を怠け者にしてしまう」とアウンさんは言うのだ。

国境にカレン民族解放軍と提携するタイの工業団地

タイ最大のアマタ・ナコーン工業団地などを経営するアマタ・コーポレーションCEOのウイクロム・クロマデイト氏（1953年生まれ）は20年ほど前、新聞記者だった筆者に「工業団地を大成功させた後はピルグリム（巡礼者）になる」と言っていた。

2013年にはウイクロムさんは数10人の同行者を連れて日野自動車のタイ工場に特注した豪華車両を使ったキャラバン隊の隊長としてユーラシアを回り始めたが、どうやらそれが「巡礼」にあたるらしい。2013年は中国、ロシア、カザフスタン、ミャンマーの4万5000キロを各地で要人と会いながら7か月間かけて走破したウイクロムさんの旅行記は『第2の新生活（チウィットマイ2）』として全国のセブンイレブン各店で特価25バーツで販売されている。次回は2015年に中国沿岸部を北上、北朝鮮、韓国、日本、台湾などを回るといふ。ウイクロムさんに著書は多いが、前著『AEC』では「AEC（ASEAN経済共同体）でタイ人は得するか損するか」を考察していた。

ウイクロムさんはアマタ・ナコーン工業団地を永遠に発展させるための次の手も考察しながら旅しており、「隣国のベトナムとミャンマーが最重要国。1994年にベトナム

ダウエイ (Dawei) 開発のこれまで

- | | |
|------------|---|
| 2008年5月19日 | タイとミャンマー政府で覚書(MOU)に署名 |
| 2008年6月12日 | ITDとミャンマー港湾公社(運輸省)がMOU署名 |
| 2010年10月 | タイのアピシット首相が首都ネーピドーを公式訪問し、ダウエイ・プロジェクト認可を希望 |
| 2010年11月2日 | ITDとミャンマー港湾公社が深海港・工業団地・タイへの道路と鉄道のBOT方式での開発で枠組み合意 |
| 2011年1月27日 | ミャンマー政府はダウエイ経済特区(DSEZ)法を制定 |
| 2011年3月30日 | ミャンマーに新政府＝首都ネーピドーの連邦議会でテイン・セイン首相が大統領に就任。 |
| 2011年4月28日 | ミャンマー政府がダウエイ・プロジェクトで中央実行委員会を設置 |
| 2011年6月 | ITDのプレムチャイ社長が来日し日本企業の参加を呼びかけ |
| 2011年11月 | インドネシアのバリ島で開催された第3回日メコン首脳会議で、野田首相(当時)が「ダウエイ開発で総合開発調査を実施する」と発言 |

児童の雇用を誇る経営者

ミャンマーの貧富差は大きい。ローカルの工場で多く見かける子供の労働者たちは与えられた仕事を黙々とこなしているが、笑顔がまったくないことがいつも気になる。学校に行けずにガソリンスタンドなどの店舗で労働に従事している子供たちもあちこちに见かけるが笑顔がない。



少年ばかり雇っているヤンゴンで人気の喫茶チェーン

ミャンマーの工場で従業員の多くが少女なので、その食品工場の社長に聞いてみたところ、「採用する時に15歳以上かどうかチェックしている。『15歳以上』と口頭で答えた人だけを採用している。敢えて少女を採用しているわけではない。きわめて貧困状態にある家庭の少女を助けてあげたいという気持ちで採用している。その子が住む地元の村長さんなどから家庭が困窮しているのを採用して助けて欲しいと頼まれるケースが多い」と胸を張った。

欧米企業ではこのような児童労働を厳しくチェック、一般

農業の潜在力は大きいが：

ミャンマーでは「新米」よりも数回前に収穫された「古米」の方が高く売られているのは、ミャンマー人は古米の方が新米よりも美味しいと感じるからだ。軍事政権時代、コメの2毛作、3毛作栽培に力を入れていたが、半年近くに及ぶミャンマーの長い雨季のために洪水が3毛作を妨げている。ミャンマーの主食であるコメが、かなりもったいない扱いをされている光景は貧困国ミャンマーのあちこちで見てきた。ヤンゴンに飢えの光景は見当たらず、レストランでは客が食べ残したご飯は惜しげもなくゴミ箱に捨てている。企業や工場での昼食として自宅から持参する弁当は、昔は錫製の箱に中身は日の丸弁当といった感じだったが、今やステンレス製の3段重ねで内2段はおかず。主食のご飯はかなり食べ残して捨てていた。

ミャンマー料理はインド料理と似て、油の中に沈んでいるような肉類やカレーのようなオカズを素手でおコメと混ぜながら食べる。筆者はアジア各地の大概のローカル料理は好きだが、ミャンマー料理の油濃いメニューだけは糖尿病を患っていることもありほとんど食べない。ミャンマーでは油を多く使うほどごちそう、といった感じがあり、食

スーチャー氏を激変させたモンユワ騒動

2013年3月末、中国企業の銅鉾山開発でその1年ほど前から地元との対立が深まっていたミャンマー北部のザガイン管区モンユワ(Monywa)を訪問した。ザガイン管区最大都市であるモンユワでは2012年に入って僧侶による暴動が起きた。銅鉾山では金も産出するところが多いが、問題になった中国のレパダウン鉾山でも銅と同時にかなりの金も産出、「プラチナ(白金)も含まれている」と聞いた。元はオーストラリア企業でそこを中国企業が買収した銅鉾山からは銀を含む鉾石(本命は金鉾石なのだが銀鉾石としてミャンマーから持ち出しているとされる)が、公害を出していると地元民が問題にしていた鉾山だが、さらには仏教遺跡を破壊してまで採掘作業を進めたことに住民が反発、鉾山開発を進める中国企業がこの銅鉾山からの全面撤退を要求するまでに事態が悪化していた。そして2012年11月29日、モンユワ近郊で銅山開発に反対する地元民を中心に数百人が集結していた場所をミャンマーの治安部隊が襲撃して怪我人多数を出す事件が発生した。

このモンユワの鉾山での問題解決を図るため、民主化運動や野党リーダーでミャンマー

鉾山問題の背景に欧米の諜報活動も？

モンユワ市民にはこの鉾山問題の背景には欧米の諜報活動もあると指摘した人もいた。ミャンマーの一部不良弁護士や学生運動家くずれの人によるおカネ目的の扇動にすぎない、という指摘もあった。中国企業への公害反対運動は、実は地元民から発生したのではなく、外部の人物の工作によるものというのだ。

欧米の諜報活動というのは、2011年9月30日、大統領に就任してから7か月だったテイン・セイン大統領が、イラワジ河の上流（カチン州）で中国が建設を開始していた大規模水力発電所であるミッソンドム（高さ152メートル、出力3600メガワット）についての公開公聴会を開催、「国民の意思として工事を中断する」と大統領が発表した頃から増えた、とされている。直後の10月10日にはテイン・セイン大統領の特使として外相を中国に派遣し、習近平副主席（当時）に北京の人民大会堂で面会して、ダムの建設中止について説明、理解を求めたが、日本を含む西側先進国はこの動きを見て「テイン・セイン政権は中国との関係縮小を考えている」と受け取った。

ミッソンドム工事中止後の米国の行動は早く、クリントン国務長官がミャンマーを初

● ミャンマー年表 (松田 健まとめ) ●●●

● 1886年 ビルマ全土が英国領インドに併合される

● 1942年 日本軍が英国軍に勝ち日本軍政統治となる

● 1947年 アウン・サン将軍が暗殺される

● 1948年 ミャンマー(ビルマ)が独立しウー・ヌー首相が就任

● 1962年 ネ・ウイン将軍のクーデターでビルマ社会主義計画党(BSP)支配に

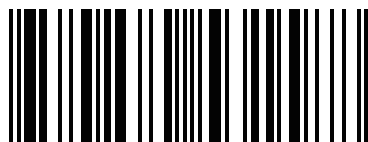
● 1988年4月 アウンサンスーチー(Aung San Suu Kyi)氏(以下スーチー氏)が英国からミャンマーに帰国

● 1988年7月 クーデターで2011年3月まで続く軍事政権が発足

● 1988年8月8日 10万人規模の抗議運動が発生

● 1988年9月18日 ソウ・マウン大将のクーデターでSLORC(国家法秩序回復評議会)を設立

● 1988年9月 スーチー氏がNLD(国民民主連盟)書記長に就任



9784880531588



1922060015000

ISBN978-4-88053-158-8

C2060 ¥1500E

定価（本体 1,500 円＋税）

松田 健 （まつだ けん）

1947 年小豆島生まれ。1971 年上智大学法学部卒。23 年間の日刊工業新聞記者（最後の 1 年間は総合デスク）を経て、1995 年に独立。年のほとんどをアジア各地にいて、現地発の経済やビジネス情報を「アジア・ジャーナリスト」として日本の各媒体や企業に発信中。アジア関係のビジネス・コンサルタントとしても活動している。

著書は『アジアビジネス新次元』『アジアから見た日本の空洞化』『中国・広東省でやる気向上』『台頭するインド』『魅惑のミャンマー投資』『今こそフィリピンビジネス』など。

E メール： kenmazda9999@gmail.com

- 1 章 ● 癒しの国ミャンマー
施しを最重要視するミャンマー人
- 2 章 ● ミャンマー連邦共和国の悩み
アジアの中心めざす首都ネーピドー
- 3 章 ● ミャンマー人がいるビジネスの現場
マンダレー ゴールド物語
- 4 章 ● ミャンマーの工業団地
工業用地の整備を進める政府
- 5 章 ● ミャンマーで勝つには
「日本企業は売る気がない」の評価では勝てない
- 6 章 ● 世界に翻弄されたアウンサンスーチー氏
スーチー氏を激変させたモンユワ騒動 一部抜粋

⋮